

小論文

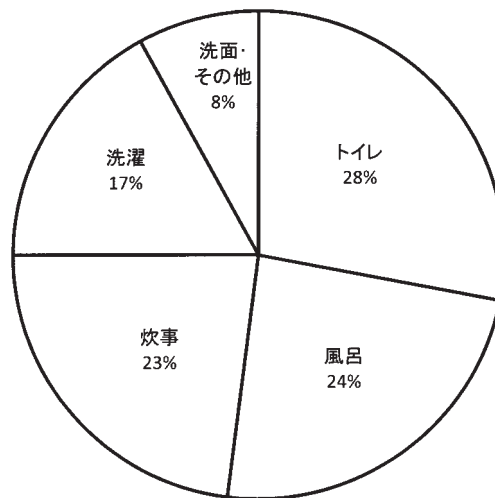
平成22年度 心理学部 公募制推薦入学試験問題

(試験時間60分)

ニュースは、その情報を自分たちの社会・生活の中で実際に活かすためのものでもあります。あなたは、最近どのようなニュースに関心を寄せ、そこからどのようなことを学びましたか。800字以内で述べなさい。

環境システム学科

湿潤地域で生活する日本人が一日に使う水の量は約307ℓで、乾燥地域に暮らす人々の使用量は5ℓといわれている。その内訳は図のとおりである。この水の使用量の違いに現れる湿潤地域と乾燥地域における水環境の違いを述べ、また、その水使用量の違いが引き起こすと考えられる水環境問題について述べよ (800字以内)。



『平成20年版 日本の水資源』による

図 日本における目的別家庭用水使用量の割合

地理学科

扇状地上の土地利用について、教科書等に「扇状地は水がしみ込みやすいので、日本の場合は水田にすることがむずかしく、おもに畑や果樹園として利用される。(帝国書院新詳地理Bより)」などと書かれていることが多い。この記述の当否に関して、次ページの2枚の地形図中の扇状地をみながら800字以内で論じなさい。



図1 2万5千分の1地形図「五日町」(2007年発行、原寸)



図2 2万5千分の1地形図「中野西部」(2006年発行、原寸)

社会福祉学科

以下の文章を読み、以下の2点について合わせて800字以内で記述しなさい。

- (1) 「機械やコンピューターのできない仕事」とはどのような仕事でしょうか。文章中の例以外のものを挙げなさい。
- (2) それが、なぜ機械やコンピューターではできないのかについて理由を述べなさい。

ただ、これからの人間は、機械やコンピューターのできない仕事をどれくらいよくできるかによって社会的有用性に違いが出てくることははっきりしている。どういうことが機械にはできないのか。それを見極めるのには多少の時間を要する。創造性といった抽象的な概念をふりまわすだけではしかたがない。

本当の人間を育てる教育ということ自体が、創造的である。教室で教えるだけではない。赤ん坊にものごころをつけるなどというのは、最高度に創造的である、つよいスポーツの選手を育てあげるコーチも創造的でなくてはならない。芸術や学問が創造的であるのはもちろんである。セールスや商売もコンピューターではできないところが多い。その要素が多ければ多いほど創造的であるとしてよい。

人間らしく生きて行くことは、人間にしかできない、という点で、すぐれて創造的、独創的である。コンピューターがあらわれて、これからの人間はどう変化して行くであろうか。それを洞察するのは人間でなくてはできない。これこそまさに創造的思考である。

(外山滋比古『思考の整理学』より)

人間福祉学科

地域社会が大きく変化し、さらに格差社会といわれ、「子どもの貧困」や子どもの育ち環境の劣悪化などが指摘されている。このような状況の中で、子どもの育ちを保障していくためには、どのようなことに留意しなければならないのか。800字以内であなたの考えを具体的に述べなさい。

小論文

平成22年度 経営学部 公募制推薦入学試験問題

(試験時間60分)

いわゆる「企業不祥事」が、テレビ・新聞等で多く取り上げられています。不祥事が多発する原因についてのあなたの見解を述べ、不祥事を防止するために経営者がなすべきことを、あなたなりに考えてください。(800字以内)

【問】

下記の文章（朝日新聞・2009年8月4日・朝刊・社説）を読んで、各設問に対し、答えなさい。（試験の都合上、文章の改行を変更したところがある。）

- 1、この社説を読んで、最も適切な見出しを付けなさい。（20字以内）
- 2、この社説を読んで、国民の司法への参加という立場に立ち、新たにスタートした「裁判員制度」の今後の役割について論じなさい。（合計800字程度）

黒い法服の裁判官3人だけが占めてきた裁判官席。そこに私服の6人が二手に分かれ、裁判官たちを挟んで座った。後ろには補充裁判員3人も控えた。こうしてきのう、市民が参加する裁判員裁判が始まった。

陪審制があった戦前の一時期を除き、連綿と続いてきたプロだけによる日本の裁判に、主権者である国民の代表が参加した歴史的な日である。

最初の審理として東京地裁で裁かれているのは、72歳の男が隣人の女性を刺殺した、として殺人罪で起訴された事件だ。法廷からは、供述調書や鑑定書といった書類の山が消えた。代わりにモニター画面に、主張や証拠物の要点をまとめた文章や画像が映しだされた。検察官や弁護人は、裁判員の方を向いて口頭で訴えた。これまで飛び交っていた法律家の専門用語はかなり減った。

裁判員の負担を減らすため、審理は集中して行われる。この裁判も4日連続で審理し、判決を言い渡す予定だ。

これまでは公判の間隔を空け、裁判官は法廷外で調書を読み込んだ。しかし、裁判員が膨大な書面を読むことはできない。法廷で繰り返し聞かれる証人尋問や被告への質問をみて、検察官による有罪の立証に合理的な疑いがないかを判断することに力点が置かれる。

この法廷中心の審理こそが、日本の刑事裁判を大きく変えることになるかと期待されている。

捜査員は容疑者から供述を得ることに心血を注ぐ。取調室でひとたび自白すれば、被告が法廷で否認しても、裁判官は自白調書の方を重視する傾向が強かった。

それが「調書裁判」といわれ、法廷が検察の起訴を追認する場になっていると批判されてきた。過度に自白調書に寄りかかる裁判が、今日まで続く冤罪史の背景の一つになってきたことも否めない。

司法に市民が参加してきた歴史を持つ欧米では、陪審員や参審員の目の前でされる法廷での審理が中心だ。それとは異なる日本の刑事司法の姿は、「ガラパゴス的」といわれてきた。その孤島へ、裁判員といういわば「新種」が上陸してきたわけだ。

裁判員に求められているのは、日々変わりゆく社会に身を置き、虚々実々の世間を生きる庶民ならではの感覚だ。プロの裁判官が持ち得ないような視点こそが大切なのだ。

そんな市民の視点を反映するには、裁判官との評議で裁判員たちが自由に意見を言えることが前提となる。その雰囲気を作るのは裁判官の責任だ。

この制度には、人々の間になお困惑や抵抗感もある。制度を定着させ、皆が共感できるようにするには、市民の感覚を判決に生かした実績と経験を着実に積み重ねていくことだ。

小論文

平成22年度 経済学部 公募制推薦入学試験問題

(試験時間60分)

立正大学の標榜する「モラリスト」たれ、というのはどういう意味か、具体的な例を挙げて（例えば、歴史上の人物、文学等に登場する人物、現存する人物などの行動にふれて）、自分の考えることを自由に述べなさい。